

2. 各感染症状況報告

1) インフルエンザ定点把握疾患

●インフルエンザ

平成27(2015)年のインフルエンザの患者発生は、第35週までは2014/2015シーズンを、第36週以降は2015/2016シーズンを反映したものである。同年の大阪府内のインフルエンザ定点からの累積患者報告数は53,616(定点当たり累積報告数:174.64)であり、前年の累積患者報告数95,872(定点当たり累積報告数:313.31)よりも大幅に減少した。これは2014/2015シーズンの流行の立ち上がり全国的に早く、大阪府ではまだ11月中であった平成26年第48週に定点当たり報告数が1.00を超えて流行が開始となり、第52週には早くも定点当たり報告数が34.32と同シーズンの最高値を記録した一方で、平成27年に入ってから第4週の定点当たり報告数が28.05となったものの、その後比較的早期に減少していったことが影響している。また一方で、2015/2016シーズンのインフルエンザの流行は立ち上がりが遅く、大阪府の定点当たり報告数が12月中旬に1.00を超えていなかったことも無視はできないと思われる。

前述したように、2014/2015シーズンは立ち上がり早く、インフルエンザの定点当たり報告数が1.00を超えたのは全国平均値も大阪府も共に2014年第48週であったが、その後大阪府の報告数は急増して第52週にピークとなったが、その値は全国平均値(26.72)を大幅に上回り、同時期の47都道府県の定点当たり報告数の中でも最多であった。同シーズンの全国のインフルエンザの流行のピークは2015年第4週であったが、大阪府は12月末に記録した報告数を1月以降に超えることはできず、12月中旬に流行のピークを迎えるという珍しい流行形態となった。

2014/2015シーズンのインフルエンザウイルスの検出状況をみると(<http://www.nih.go.jp/niid/ja/iasr/510-surveillance/iasr/graphs/5899-iasrgv1415.html>)、大阪府では同シーズン中に検出された259株中AH1pdm09は0株(0.0%)、AH3亜型は225株(86.9%)、B型は34株(13.1%)であり、AH3が大半を占めていた。これは同シーズンの全国のインフルエンザウイルスの検出割合(総検出株数6155、AH1pdm09は1.0%、AH3亜型84.9%、B型14.1%)と類似しており、全国の流行状況が大阪府内でも反映されていたものと考えられる。一方、2015/2016シーズンは2016年4月9日現在大阪府内の総検出株数202のうちAH1pdm09は43.1%、AH3亜型8.9%、B型48.0%と前シーズンとは異なってAH1pdm09とB型の混合流行となり、前シーズンは流行の主流であったAH3は10%にも満たない数となっている。2015年1年間のインフルエンザウイルスの検出状況は、両シーズンの流行を反映しているというよりも、やはり2015/2016シーズン影響が大きく、総検出株数153のうちAH1pdm09は2.0%、AH3亜型73.9%、B型24.2%となっている。

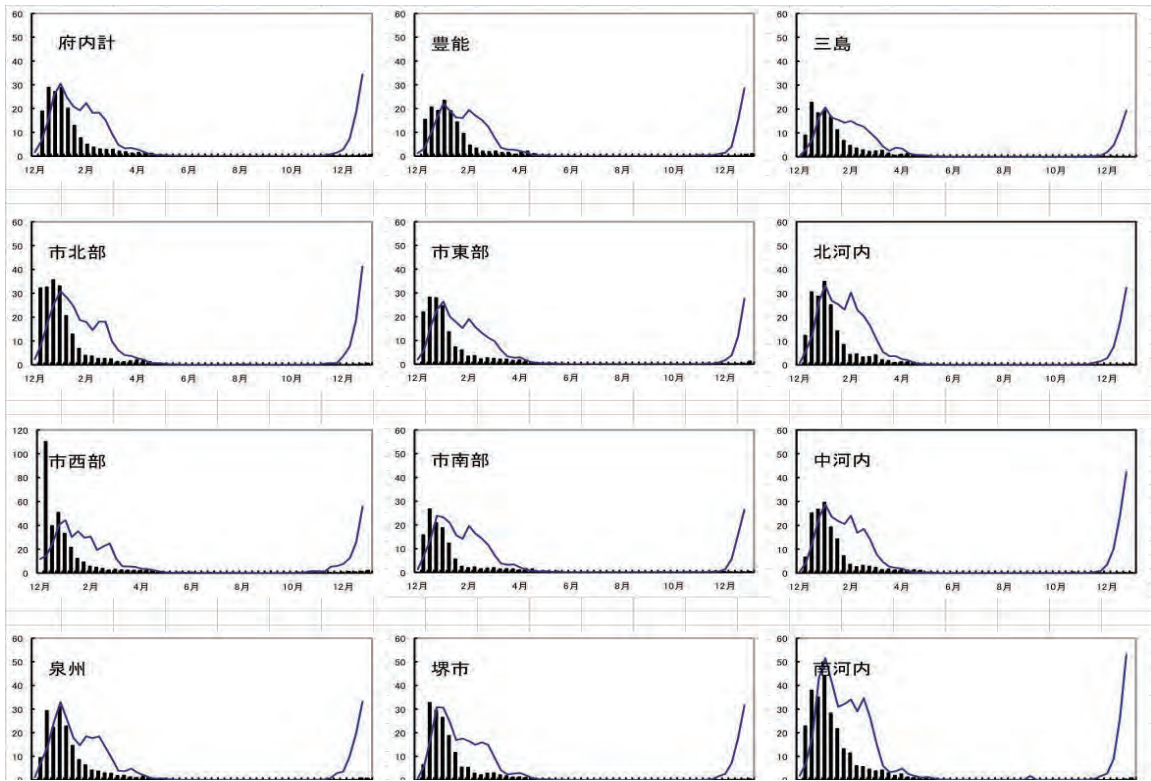
大阪府立公衆衛生研究所で2014/2015シーズンに分離されたAH3亜型から無作為に抽出された12株は全てオセルタミビル、ペラミビル、ザナミビル、ラニナミビルの抗インフルエンザウイルス薬に感受性を示した。また、同シーズンの最初に分離されたB型株2株もこの4つの薬剤に感受性を示した。

(文責:安井)

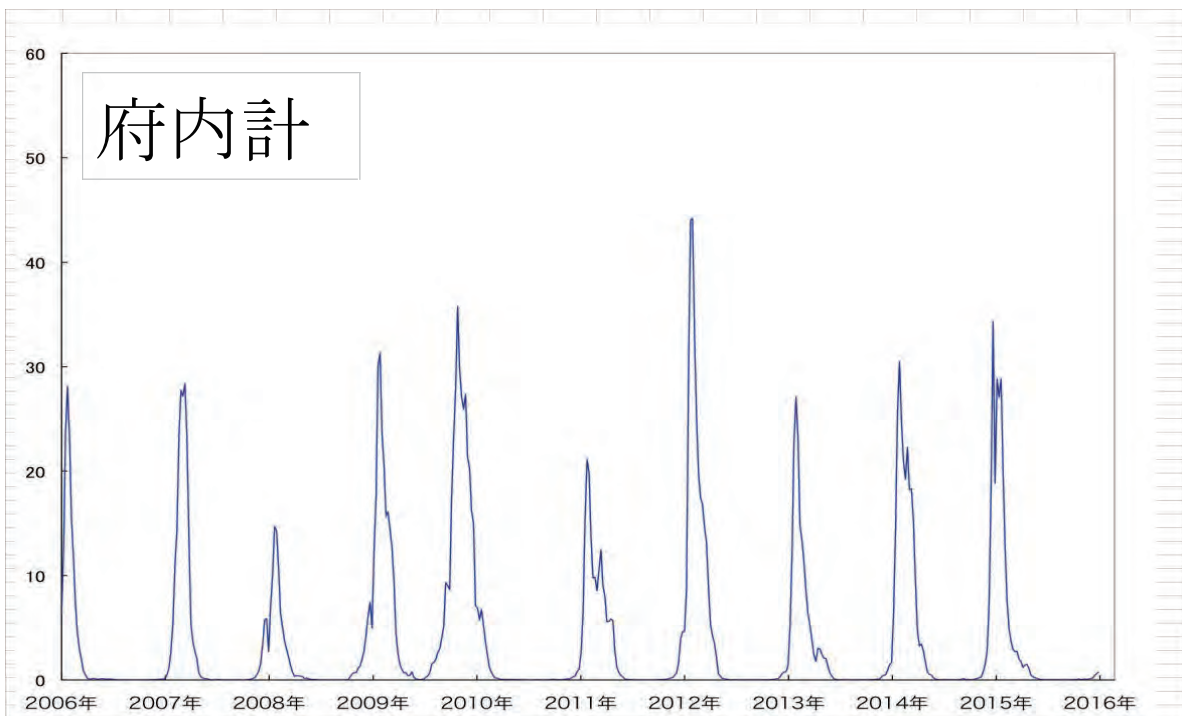
インフルエンザ

線 (H26年第1週～第52週)

棒 (H27年第1週～第53週)



線 (H18年第1週～H27年第53週)



2) 小児科定点把握疾患

●RSウイルス感染症

平成27年RSウイルス感染症の報告数は10,596例で、前年より2,022例と、23.6%増加した。小児科・眼科定点報告対象13疾患総報告数の6.8%を占めている。定点あたり報告数の年平均は1.00で、全対象疾患中4位であった。全国集計の報告数は120,049例で、前年より19,655例と、19.6%増加した。総報告数の4.9%を占め、定点あたり年平均0.72の報告があり、対象疾患中第4位であった。

大阪府における週別の定点あたり報告数は、第1週より1を超えており、第6週に1.25となった後漸減し、第29週に年間最低値の0.02となった。第31週以降は増加に転じ、第41週に1.36、第46週に2を超え、49週に年間最高値の4.05となった。

RSウイルス感染症の報告数は、平成23年からは夏期から増加傾向がみられ、平成26年も第36週で1を超えたが、平成27年については、第41週で1を超えており、夏期の増加傾向はなく、冬期のピークがみられた。また、平成26年の最高値は3.19であったが、平成27年は4.05に増加した。全国も同じ傾向で、最高値は第50週の2.37であった。

全国の年間報告数は、平成25年が96,534例、平成26年は100,394例、さらに平成27年は120,049例と増加している。

年齢別報告例数は、0歳児が4,361例で全体の41.2%、1歳児が3,342例で31.5%と、2歳未満で72.7%を占めた。さらに3歳児まで含めると、全体の94.6%を占めている。小児の感染症において、RSウイルス感染症は、初感染が低年齢であるほど、その症状が顕著に現れ、重篤性が増す極めて重要な疾患である。今後も一年を通じた報告数の推移について、より一層の注意が必要であるとともに、パリビズマブ投与の対象となる児については、流行初期において投与を考慮されたい。

ブロック別の年間平均報告数を定点あたりで見ると、⑤南河内 1.68、⑧大阪市北部 1.47、⑨大阪市西部 1.43、④中河内 1.22、③北河内 1.12、⑦泉州 0.97、①豊能 0.78、⑩大阪市東部 0.75、⑪大阪市南部 0.73、⑥堺市 0.62、②三島 0.49 と続いた。

病原体定点医療機関からのRSウイルス検出数は、年間73件あった。検出数の最も多い月は11月の14件で、12月の13件、10月の9件と続く。年齢別検出数は、0歳～3歳児で62件と、年間検出数の84.9%を占めており、同年齢報告数の比率と同様に高かった。

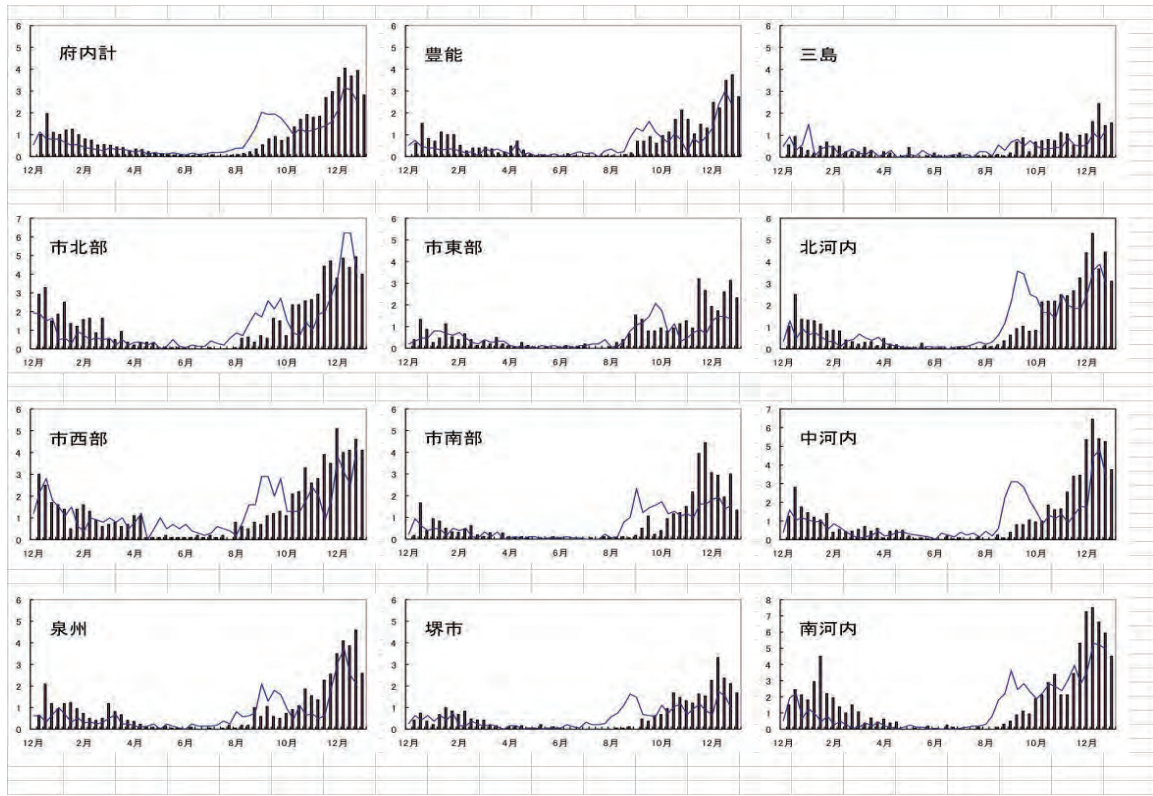
疾患別では、下気道炎が43、RSウイルス感染症が15と呼吸器系疾患が58件あり、年間RSウイルス検出数の79.5%を占めた。

(文責：永井)

RS ウイルス感染症

線 (H26年第1週～第52週)

棒 (H27年第1週～第53週)



線 (H18年第1週～H27年第53週)

